

平成19年 8月 12日

平成19年度 教師海外研修(ネパールコース)研修報告書学校名 高知県立高知丸の内高等学校担当教科 理科氏名 安藤千速**1. 今回の研修参加に際して、特に主眼をおいた点**

治安・政治情勢・経済状況・貧富の格差など、教育を支える周辺の環境が異なる国で、国家の事業としての教育は何を教えるのか、学校で学ぶ生徒たちはどんな気持ちでいるのかを知ることにより、日本の高校生たちのキャリア教育に役立てることを目標にして参加した。

そのために、次のことを主眼とした。

- ・ 教育の周辺の環境を知る
- ・ 教育の目的を知る
- ・ 生徒の意識を知る

2. 視察を通して参考になったこと／疑問に思ったこと

次のことが参考になった。

- ・ 公立学校の現状(ハードウェアとしての環境)
- ・ 多民族多言語、カースト制、貧困など、教育にとって課題と思われるネパールのバックボーン
- ・ 生徒たちがこたえてくれた、質問に対する回答
- ・ 学校での生徒たちの表情
- ・ 一緒に参加したほかの先生たちの意見や感想
- ・ 水道や道路など社会インフラの現状
- ・ 商業地区での経済活動の現状
- ・ 私立学校と公立学校との二重構造
- ・ ホームステイした家庭の生活状況

3. 教育指導への活用について

まず、ネパールの社会情勢をうかがうことができる写真を見せ、この国の現状と、なぜそうなっているのか、どうやって打開していったらいいのかを話し合わせる。次に、学校での生徒たちの熱心さがわかる写真を見せ、教育のもつ深遠なる意義と、生徒たちの一生懸命さの理由を考えさせる。たくさん撮ってきた写真を活用して、担当する高校生に伝えたい。

なお、中学校教員で構成される高知市教育研究会で発表の機会を得たので、そこでも同様の展開を図りたい。

4. 研修に関する全般的な所感／意見について

百聞は一見にしかず。まして、一聞しかなかったので、参加の機会を得たことと、現地スタッフの準備に対してたいへん感謝している。

毎晩、一緒に参加した先生たちと意見交換をしたことで、自分だけでは気がつかない発見をすることができたり、集団として円滑に意思疎通をすることができた。この研修をより有意義なものにするために効果的であった。

慣れない環境で積極的に情報収集するために、宿泊先のホテルも十分の環境だった。

私の充実した体験を、同じように経験して欲しい先生がいるので、次年度の参加を勧めてみたい。

5. JICA四国に対する要望・提言

研修全般に対する感謝の気持ちが、そのままJICA四国に対する気持ちである。

参加にあたり、JICAの認知度が予想以上に低く、いたるところで説明を要したことが意外であり、残念である。この企画に参加を希望する教員が増えることで、浸透していったら欲しい。

6. 今後の本研修参加者へのアドバイス

今年度、私たちの前半戦がうまくいったこと理由は二つある。ひとつは、メンバーの個性が違って、同じ物を見ても気がつくことや発見することに偏りがあったこと。ふたつ目は、メンバー間の敷居が低く、自由に意見交換することができたことである。

本研修だけでなく、チームで取り組む時に大きな成果を挙げようとするのであれば、なるだけ異質のメンバーどうしが互いの個性を認め合うこと、メンバーどうしが意見交換する支持的な雰囲気を作ることが大切で、この二つが成立すれば、あとは自律的建設的に発展することができる。

7. 各訪問先の所感

日時	訪問先	発見したこと・学んだこと⇒それを何につなげるか？ その他所感
7月29日	関西空港から出発 バンコクで1泊	<p>日本のODAで作られたというバンコク空港は、大きくて清潔だった。空港から市街地のホテルまでの道もよく整備されている。モノレールも建設中だった。</p> <p>それに対して、外国人向けのホテルのすぐ裏には、市民が住むスラムが広がっている。この国が、バンコク空港をアジアのハブ空港に育てることで、経済成長の突破口とし、やがて国民全体に恩恵を与えることを意図していることがよくわかる。国家予算の多くを、空港と航空会社につぎ込んでいるだろう。</p> <p>タイという国の国家としての戦略を、最新の機材ぞろいのタイ航空で感じた。</p> <p>この国は数年で、見違えるほど変わるだろうと感じた。</p>
7月30日	バンコクからカトマンズへ JICA事務所 JICA所長宅で夕食	<p>カトマンズ空港はネパール唯一の国際空港らしい。建物は質素、税関職員もなんだか元気がない。</p> <p>JICA事務所でネパールの概容を聞く。</p> <p>夕食をご馳走になった所長宅は、警備員やコックがいて、自家発電を備える豪邸。屋間教えてもらったネパールの概容から程遠い生活ぶり、この国におけるJICAの立場がよくわかる。</p> <p>日本にとって、JICAが「協力」を手段とした外交カードであることを再認識した。</p>
7月31日	カリキュラム開発センター 教育開発センター 教材センター	<p>国家の事業として、ネパールの教育が直面している課題のいくつかを知ることができた。</p> <p>現に今、取り組んでいるいくつかのことを知るだけでなく、やり取りを通じて、政府関係者たちの姿勢や雰囲気を感じることもできた。多民族だからなのか、彼らは話し合いにあたって自己主張しあうことが多く、互いの意見に耳を貸そうとする姿勢が少ない。政府の施設で説明を受けながら、国家としての教育の方向がわからず、やや消化不良気味であった。</p> <p>教科書を印刷している教材センターでは、日本のシニアボランティアが頑張っていた。職人肌の彼を見ていると、シニアの派遣意義がよくわかった。</p>
8月1日	小学校4校訪問	<p>私にとって、一番の分析の対象であり、主題に大きくかわる現場訪問である。</p> <p>公立学校が物質的に恵まれていないことや、生徒を取り巻く学校以外の環境がよくわかる。しかし、生徒たちの顔は充実しており、向学心も、将来に対する希望も大きかった。物質的な条件が恵まれていないことは自明であるが、ひよっとすると教育の質自体は、日本よりも上かもしれないと感じた。もとより教育とは、ノートや校舎がするものではなくて、生徒と教員とのかかわりの中で、意識として行われるものである。</p> <p>訪問した学校では、協力隊の皆さんが努力されていて頭が下がる思いだが、教育現場を熟知したシニアが数人いたら少し違うのかもしれないと感じた。</p>

8月2日	浄水場など水道供給施設見学	<p>水道供給にあたっては、地形的な条件の厳しさと、社会インフラ不足の現実を見た。昔から使われている湧水を生活空間に引っ張った設備などが現在も現役で利用されている。昔、道路に埋め込んだ配管は漏れて、上下水が混じっている。</p> <p>水道事業からも、この国の長期的なスパンで将来を見据えた政治のなさ、住民たちの生活レベルでまちまちな対応していかざるをえない状態とを感じた。</p> <p>この国に必要なものは、技術だけでなく、それを展開して青写真を描く能力、ストラトジーであると思った。</p>
8月3日	非正規教育クラス	<p>ここでも日本人が中心となって活躍していた。ネパールの随所に活躍している日本人がいることをうれしく思う。</p> <p>マオイストの台頭により、西部からカトマンズ市内に逃げ込んでくる人が増え、市内の人口増加がもともと不足しているインフラ整備をさらに深刻なものにしている。教育も同様で、非正規教育のシステムは河川敷にバラックを建て生活するようになった人たちが教育を受ける手段となっている。非正規教育とは学校教育とは別の、日本でいう塾のようなものかと思えばそうではなく、学校教育そのものであった。非正規教育でありながら、その事務所は政府施設内にあり、プライベートスクールとガバナメントスクールを併せて、3つの教育システムが存在することになる。一言で一般化するのには難しいが、格差を象徴するシステムなのかもしれない。</p>
8月4日	ホームステイ	<p>ここまで行動をともにしてきた日本人どうしが、一人ずつに分かれて、それぞれの経験をする機会である。2日間と日数は長くはないが、文化の違いと自分の年齢のせいか、十分濃厚な時間を過ごすことができた。長期間のホームステイは若いうちに限る。</p> <p>私がステイしたお宅は、ブラーマンという民族でこの国のカーストでは最も高い。カトマンズ市内の大きな家の庭に、ルンビニから家族と離れてやってきた使用人の少年(8歳)と、庭士の家族4名が住んでいた。ルンビニから来た少年は、カトマンズ市内に奉公に来ることにより、学校に行かせてもらっていると言う。少年にとっての一番の財産は教育である。この国では英語をしゃべることができないと就業の機会は激減する。小学校1年生から始まっている英語教育が、貧困からの脱出のための手段であると思えた。</p> <p>スワヤンブナート、パシュパテナート、クマリの館、バクタプルの古都、パウダニールカンタなどに連れて行ってもらった。ヒンズー教の寺院について教えてもらうことができ、市内の観光は、これで十分足りた。</p>
8月5日	ホームステイ	<p>ホームステイ2日目、公立の中学校1つと、市立の小中高等学校1つにうかがうことができた。</p> <p>公立の中学校は、私立の学校(Bhanubhakta Memorial Higher Secondary School)は、公立校と大きく違っていた。まず、施設設備が日本並みでまったく貧しくないこと、そして、インタビューした生徒たちが、非常に高い意識を持っていることである。私立校は政府からの財政援助を得ていないと校長は説明していたので、この国の学校に通う人たちに、大きな格差があることがよくわかる。</p>

		<p>生徒たちへのインタビューの内容からは、公立小学校で多かった「医師になりたい」という希望から、「エンジニア」が多くなった。具体的な発展のための方法が見据えやすくなっていく年齢だからと思われる。</p>
8月6日	農場見学	<p>梨や柿を栽培する農家を2軒見学した。この国に来てから食べたものの中で一番うまかったのは、この日食べた梨である。脂っこい料理ばかりで腹を下していた私にとって、梨の味は最高だった。この国でも商品として流通して欲しい。</p> <p>2軒の農家を比較すると、儲かりそうだからとどんどん植えてごちゃごちゃになってしまっている農家と、整然と農園を作っている農家とであり、今日での利益の生み方が異なっていた。</p> <p>柿は6年で収穫できるようになるらしい。6年後の農業経営を見通して、農場整備をすることができたか否かで、結果が大きく異なっていることで、ストラトジーの大切さに気付いて欲しい。</p>
8月7日	JICA事務所	<p>次長の挨拶の中に、以前自分が手がけた橋を架けるプロジェクトが、飛行機で上空を通過するたびに結果となって残っているのを見ることができてうれしいという内容があった。仕事の内容に手ごたえを得ることができる人の満足そうな表情だなと感じた。働くことの喜びや意味を、若い高校生にも感じて欲しい。</p>
8月8日	バンコクから関西空港へ	<p>タイ航空の機内食で食べた白身魚がとってもおいしかった。一緒に行っていたみんなが同じことを感じた。日本食のおいしさを通じて、民族のバックボーンの大切さを再確認した。</p>